

沖ノ島の中世土師器小皿について

岡 崇

一．はじめに

沖ノ島の大規模な祭祀（国家的な祭祀）は、九世紀末をもって終焉を迎えるが、なおも宗像地域の信仰として現在まで形を変え神事が続いている。古代において大規模な祭祀が行われた痕跡は、沖ノ島祭祀遺跡の調査成果によって証明されており、現在もなお、信仰が継続していることを疑う人はいないだろう。宗像大社所蔵の中世文書に記される神事や江戸時代以降の地誌や絵図などに禁忌や沖津宮社殿が記されており、文献史料では信仰の継続が証明される。一方、その間における考古資料の稀薄さは否めない。信仰の継続を語るうえで全ての時期を補うものではないが、国指定史跡「宗像神社境内」の保存管理計画策定のための調査によって、中世の遺構を新たに発見することができた。詳細な調査は行われていないが、今後の研究のために概報を記すことにする。

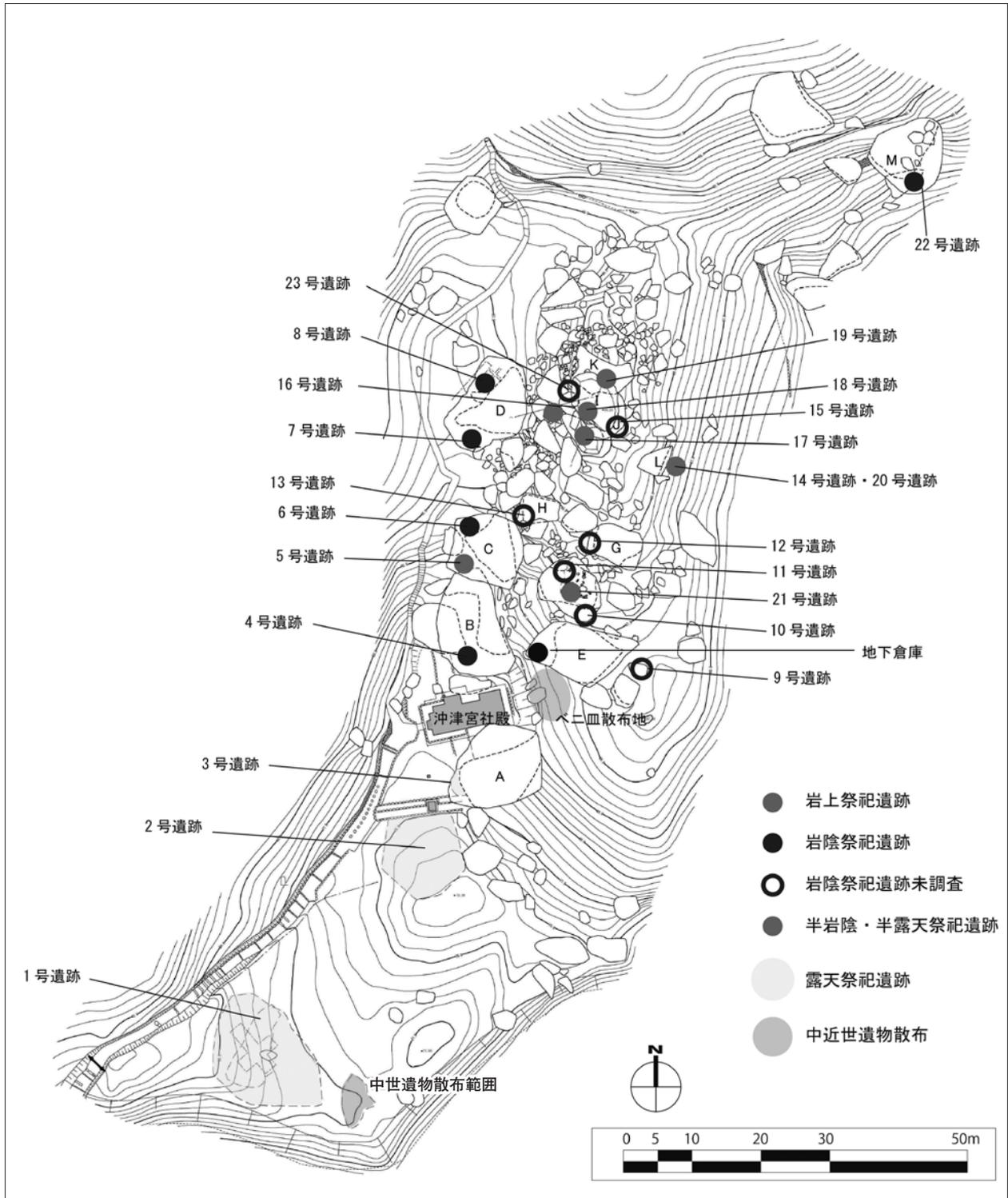
二．現地踏査

沖ノ島三次調査の報告書では、四号遺跡や五号遺跡から出土した罎口や

三叉鉾などが中世の祭祀遺物として報告されている。しかし、これらは中世の神事を体系づけるものではなく、また、中世以降の祭祀遺跡を特徴づけるものでもなかった。

平成二十四年十月九日から十二日にかけて沖ノ島の現地踏査を実施し、二十二か所の祭祀遺跡についてあらためて状況を確認した。この調査の一つとして、一号露天祭祀遺跡の現時点での遺物散布範囲や第三次調査当時のトレンチ範囲を把握するための測量調査を行った。その際、一号露天祭祀遺跡の東南東約一〇m地点に、これまでの調査でも報告されていなかった中世の土師器小皿のみが集積する新たな祭祀遺跡が発見されたのである。

この時点では、あくまでも土師器小皿の散布範囲を確認し、一号露天祭祀遺跡の範囲と中世の遺物出土範囲をあらためて遺跡分布図に入れることに留めた。



沖ノ島祭祀遺跡分布図



遺物散布状況

三・調査

この中世の土師器小皿が再び脚光を浴びたのは、世界遺産登録の過程で、ユネスコの諮問機関であるイコモス（国際記念物遺跡会議）からもたらされた情報照会であった。イコモスは、古代祭祀から現在の信仰の継統を証明する資料の提示を求めてきたため、平成二八年一〇月二六日、沖ノ島へ渡島し、現地での再調査を行った。

この再調査によって、土師器小皿は、南北二・二m、東西〇・八m四方にわたって特に密度が濃く集積していることがわかった。個々の小皿を取り上げることはできないため、ほぼ完形に近いものをサンプルとして、現地にあったままの状態で遺物を動かさずにコンベックスを当て計測した。

土師器小皿サンプル1は、外径七・八cm、底径六・〇cm、立ち上がりの



土師器小皿サンプル1



土師器小皿サンプル1（計測）

長さ〇・七から一・二cmと一応ではなく、底部は糸切で見込みは浅く回転撫であげ調整で仕上げている。

土師器小皿サンプル二は、外径七・五cm、底径七・〇cm、立ち上がりの長さ〇・六cm程度で、底部は糸切で見込みは浅く回転撫であげ調整で仕上げている。



土師器小皿サンプル2



土師器小皿サンプル2 (計測)

土師器小皿サンプル三は、完形品ではないため外径は不明だが、底径約四・〇cm、立ち上がりの長さは約三・〇cmで復元すると外径七・〇cm前後となる。底部は糸切で見込みは他の小皿に比べると深く、回転撫であげ調整で撫で調整によってできた大きなうねり一回と小さなうねり二回が、胴部側面に観察できた。



土師器小皿サンプル3



土師器小皿サンプル3 (計測)

四. 調査成果

その結果、土師器小皿の外径は、平均七・四cmで、見込みからの立ち上がり、つまり胴部側面の長さは、〇・八cmから三・〇cmと一応ではないことから、小皿の全体の形状やプロポジションとしては、統一した形ではないことがわかる。しかし、ここでサンプルとして調査した小皿以外の底部はどれも糸切仕上げであり、外径の大きさや底部の仕上げなどから推測すると平安期を遡るものは含まれないと思われる。また、近世以降の土師器皿に特徴的な径や立ち上がりに均整のとれたものとは異なることから、サンプルで示した小皿は、概して中世の特徴を示す土師器皿であることがわかる。サンプル以外の小皿も同じ特徴であり、その土師器小皿が多量に集積して散布されている状況からこの遺跡は、中世の祭祀遺跡であると考え

られる。

中世を代表する沖ノ島での神事として、「正平二十三年宗像宮年中行事」（一二三六八年成立）、「吉野期神事目録」（十四世紀頃成立）に記された御長手神事がある。これらには年四回（春夏秋冬）、日を定めずに神事が行われ、このとき沖ノ島から竹をもたらすとある。日を定めない理由としては、天候によつては沖ノ島に渡ることができず、渡れる日に神事を行っていたためと考えられている。土師器小皿の集積地とこの神事とを直接結び付ける証拠はないものの、時期的には、極めて近い頃の遺構であることから勘案して、まったく無関係とも言い切れない。また、蛇足ではあるが、沖津宮社殿へ向かう参道の中腹に生えている真竹は、御長手神事で使われていたものである可能性も考えられる。

五. まとめ

沖ノ島での中世祭祀遺構の発見によつて、九世紀末以降も継続して地域レベルでの祭祀が行われていたことが証明された。

今回の調査は、サンプルとしての応急的なものにすぎないが、平成二十八年度から宗像大社の宝物館に所蔵されている一号露天祭祀遺跡から出土した遺物の整理のなかでも、中近世の遺物が多く含まれていることが判明してきている。今後の遺物実測調査などを踏まえ調査研究の進展によつて、沖ノ島での神事の考古学的な空白時期が埋まることに期待したい。

参考文献

- 第三次沖ノ島学術調査隊編『宗像沖ノ島本文』宗像大社復興期成会 一九七九
宗像市教育委員会編『国指定史跡「宗像神社境内」国指定天然記念物「沖の島原始林」保存管理計画書』二〇一四